

校訓「清く・正しく・たくましく」



交北小だより



第 8 号  
2024. 10.1 発行  
児童数 386 名  
(10/1 現在)

## 暑さ寒さも彼岸まで

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉がありますが、その言葉通り秋のお彼岸が過ぎて一気に涼しくなってきました。朝夕はずいぶん冷えるようになってきましたが、体調を崩したりしていませんか。

10月26日の運動会に向けて各学年での取り組みが進んでいます。保護者の皆さんには、子どもたちが頑張って取り組んでいる成果をぜひ、運動会当日見ていただきたいと思います。準備などで、ご家庭に協力をお願いすることもあるかと思いますが、よろしく願います。



## 来年度交北小に通級指導教室が設置される予定です

現在、交北小学校には8つの支援学級があり、支援の必要なお子さんに対する指導や支援を支援学級担任を中心に行っています。

来年度(令和7年4月から)、支援学級に加え交北小学校に通級指導教室が設置される予定です。通級指導教室は、支援学級に在籍するほど支援が必要でないけれど、通常の学級で学習をしたり生活をするうえで、自立のためのトレーニングや支援が必要な児童のための教室です。週に1時間程度、授業時間内に通級指導教室で指導を行います。(放課後の時間での指導は原則として行いません。)

現在、通常の学級に在籍しているお子さんで、通級指導教室の利用を考えられる方は、学校までご相談ください。支援学級に在籍しているお子さんで通級指導教室への変更を考えておられる方は、各支援学級担任にご相談ください。

## 運動会の練習について

各学年で運動会の練習が始まっています。一時期に比べて涼しくなってきたとはいえ、ダンスやかけっこの練習をしていると、たくさんの汗をかきます。学校にも児童用の水を少し用意はしていますが、ご家庭でも少し多めに水分を持たせていただきますようお願いいたします。また、赤白帽や体操服の忘れ物もないようにご確認をお願いいたします。



4年生体育館での練習

## 運動会の予備日について

先日来報道で、衆議院総選挙が10月27日に行われるのではないかとされています。もし27日に選挙が行われるとなれば、本校図書館が投票所となりますので、運動会の予備日を変更することになります。詳しいことが決まり次第、お知らせいたしますので、ご理解をよろしくお願いいたします。



1	火	児童集会	教育実習	SSW
2	水			心の教室
3	木	6年修学旅行		
4	金	6年修学旅行	4年自転車安全教室(3限)	
5	土			
6	日			
7	月	視力検査	諸費振替日①	SSW
8	火			
9	水			SSW・心の教室
10	木	5年校外学習		
11	金	2年校外学習	↓	SSW・SC
12	土			
13	日			
14	月	スポーツの日		
15	火	3、4年5時間授業	運動会係活動① 諸費振替日②	SSW
16	水			心の教室
17	木			
18	金	3、4年5時間授業	運動会係活動②	
19	土			
20	日			
21	月	運動会係活動予備日		
22	火	運動会全体練習(1時間目)		
23	水	全体練習予備日		SSW・心の教室
24	木			
25	金	運動会前日準備 水曜校時5時間授業(14時下校)		
26	土	第55回運動会		
27	日	運動会予備日①(変更になる可能性があります)		
28	月	代休		
29	火	運動会予備日②		SSW
30	水	モアレ検査(5年および希望者)		SSW・心の教室
31	木			

## 校長から教職員のみなさんへ

(この部分は児童配付用には印刷しません)

2学期が始まって1か月、いろいろなことがあります。そのたびに担任の先生や生徒指導、学年の先生などが迅速に対応してくださり、心から感謝しています。ありがとうございます。まだ現在進行形なので、しばらく気の抜けない日々が続きますが、私も全力で取り組んでいきたいと思っています。

今日は、私が初任者だった時、副担任として指導していただいた大先輩の先生の、学級づくりについての文章をご紹介します。大変尊敬している先生ですが、残念ながら昨年お亡くなりになりました。でも、私はいつも先生の言葉を胸に留めて仕事をしていきたいと思っています。少し長いですが、運動会の取り組みを始めている今、少し読んでいただければ幸いです。

ぼくは、以前から子どもをつなぐ役割を果たすのは「人(とりわけ教室の周縁部に追いやられている子)」「一人ひとりの子どもの思い」「学級におけるさまざまな活動」だと思ってきた。

いずれにしても、これらはリモートでは叶わない。リモートで「思い」を伝えることは難しいからである。子どもたちの対面交流があってこそ、これらがつなぎになりうるのだ。

学級づくりの再生に向けて、いま一度「子どもたちはどんなときに『つながった』と感じるのか」ととらえかえてみたい。

人は「他者の考えに共感したとき」「自分にとって他者の存在が必要だと感じたとき」「他者が自分のことを必要としてくれると感じらえたとき」、その人(人たち)との間に「つながった」感が生まれる。子どもたちも同じだ。教室で級友との間でそうした状況が生まれれば、級友と、そしてクラスと「つながった」と感じるができる。このような場面は子どもたちの交わりからしか生まれないし、自然発生的に生まれるのはまれである。やはり、担任のリアルな子どもたちに向けての「しかけ」が必要になってくる。そして、それこそが「学級づくり」と言われることなのである。

また、運動会や体育祭・文化祭、宿泊学習など、学級におけるさまざまな活動で、共通の目標に向かう一体感が生まれたときにも子どもたちは「つながった」感を持つ。これもまた担任の「しかけ」が必要だが、重要なポイントは、「協力し合う」ことよりも「力を出し合う」という発想である。子どもには様々な個性があり、積極的に学級活動に参加する子もいれば、そうしたことが苦手な子、好きでない子もいる。「協力」は時には「同調」を強制することもある。一人ひとりが自分の出来ることを出し合う、濃淡は問わない、そんな発想が今求められている。

そして、学級において、級友から「ありのまま」の自分が認められ、「自分はこのクラスにいてもいいんだ」と自分の存在価値を見出せたとき、子どもたちは学級との「つながった」感を持つ。とりわけ、教室の周縁部に追いやられがちな、さまざまな「課題」を背負わされている子にこそ、こうした意識が生まれるよう、誰も排除しない学級づくりが求められている。担任が学級づくりに際しても、もっとも大切にしなければならない視点、それはそうした子を中心にすえ、「だれにとって楽しいクラスをつくるか」ということなのである。

(部落解放 2023.5月号 磯野雅治「コロナ後の学級づくり再生に必要なこと」より)